

仙台文学館ニュース

Sendai Literature Museum News



北山・輪王寺の参道

恩師の墓前

文学のある風景

翌日は広瀬川の上流、瀬橋付近の講武所と称する河原に下りて、松林を遺通し、しばらくそこに佇立すると、四十六年前の夏の夜、月下に衣を脱いで清流に浴し、あるいは友と讃美歌を合唱したりした少女の姿を思い浮べて、それが今ここに立っている自分であることを疑わしめる。夫に促されてようやくわれに還り、妹きく子の住む中島町へと向いました。

(中略)一緒にたつ立って、ここから程遠からぬ北八番丁、林子平の墓所の東隣り江蔵寺に、祖先より両親兄弟その他の墓をとぶらい、北山にまわって、多田家の菩提寺昌繁寺に礼し、丘の上に登って、共同墓地のある輪王寺に至れば、さらに一段高きところに、恩師押川先生(き)の、自然石より成るお墓がすぐ眼につきました。あつ先生と、思わず走りより、跪つく、眼を上げれば先生の背後には、若かりしころの知人たち、当時有為の人物として囑望された青年達のお墓が、ちょうど先生の後につき従うようにならんで立ち、石に刻まれたその名を見るほどに、私はまた少女の昔に還った心地がするのです。春やむかしというけれど、ここに來て私はほんとうに春や昔の感が深い、しかもここには墓碑を繞って潤れざる青春がある。その青春は私一人のものでもなければ、ここに眠る人々だけのものでもない、維新後ようよう二十年の時代の若き日本、殊に暗い東北の天地に、雪解の春の一時に訪れたような、初期基督教伝道者達の大きな気魄と、揺りさまさる魂の感激と、それを思えば老いの六十年もたちまちに消えて、何やら高い香気のようなものが、ふつくりと私をつつんで残るのです。

※押川先生：押川方義

(相馬黒光「広瀬川の畔」)



「広瀬川の畔」
〔相馬愛蔵・黒光著作集 5〕
1996年 郷土出版社

小池 光の 気になる日本語

24

こどものことば

読売新聞に「こどもの詩」という小さな紹介記事があって、毎日こどもが書いた詩が掲載される。選者は詩人の平田俊子さん。これがおもしろいので必ず読む。少し前には「ゆびわ」と題されたこんな一篇があった。

おかあさん
ゆびわたくさんもってるね

おかあさん
たくさんけつこんしたんだね

一読、爆笑してしまった。まだ就学前の四歳、五歳の「作品」である。結婚すると指輪が贈られることを聞いて、こう思ったのであった。

小学生や、時には中学生の作品もあるけれど、年齢が下の方のこどもが書いたものの方が奇想天外で、おもしろい。まだ日本語に慣れていない。その新鮮さが実に輝いている。まだ文字が書けないのでこどもが話したおもしろいことを親が記録して投稿するのであろう。

こどもが書いた文章のなかでは、また、虐待の果てに命をおとした東京目黒区の五歳児が書き遺した日記というか手紙というか、ひらがな

書きの文章がわれわれに衝撃を与えた。この文章を読んでこころを揺さぶられない人はいないだろう。引用するのも胸が痛むが、新聞報道されたそれを一部書き写しておく。

もうパパとママにいわれなくともしつかりとじぶんからきょうよりもっとあしたはできるよりにするから もうおねがい ゆるして ゆるしてください おねがいします

「あした」ということばがこんなにも切実で身を切られるような思いがする例をこれまで読んだことがない。わずか五歳の彼女はこんなふうにも「あした」を思っていた。夢と希望の代名詞である「あした」が、彼女にあってはこんな風にも生々しい実体を持って迫ってくるのであった。きょうよりはあしたの方が、あしたよりはあさってが、上手になる。できないことが出来るようになる。だからゆるしてほしい。この切迫した叫びの先に待っていたものはわずか五歳の命の終焉であったのだ。

こどもが話し、書く日本語は、ときに神さまのことばのようである。一語一語が、きらきら光り、かがやいている。

学芸室日記

○2018年5月～6月

いつも当館の行事や出来事をお知らせする本欄ですが、今回は「文学館の花ごよみ」と洒落こんでみました。季節ごとにいろいろな花が咲く文学館の庭。鳥や

虫の声も聞こえてきます。その様子は折にふれツイッターでも発信しています。ご来館の際は、館内だけでなく外も散策してみてくださいね。(※夏の間は虫刺されにご注意ください!)



○2018年5月19日(土)

特別展「田沼武能写真展 時代を刻んだ貌」の関連行事として、写真家・田沼武能さんの講演会を開催しました。89歳にして第一線で活躍する写真家による、エネルギッシュでユーモアあふれるお話に、聴衆たちはすっかり引きこまれました。当館の初代館長・井上ひさしを舞台稽古の現場で撮影している田沼さん。「井上さんは優しい人だと感じた」というエピソードが印象的でした。

○2018年7月1日(日)

当館が協力している、第2回「仙台短編文学賞」の募集が開始されました。仙台・宮城・東北と何らかの関連がある短編小説を対象とする本賞。今回選考委員を務めるのは、仙台在住の作家・熊谷達也さんです。応募締切は11月15日(当日消印有効)。詳しくは「仙台短編文学賞」のサイトやチラシなどをご覧ください。



講演する田沼武能さん
撮影：佐々木隆二

『今日の俳句』

金子兜太の「今日の俳句」を私が手にしたのは昭和四十一年、十九歳の時である。故郷の宮城県栗駒町岩ヶ崎（現栗原市）から神奈川県へ地方公務員として就職した二年目だった。当時、俳句界の話題を攫っていた本だったから、どきどきしながら綴じた。兜太は中村草田男など俳壇の権威を相手に一歩



も引かぬ論陣を張っていた、俳壇の風雲児だった。私は小学生の頃から父の影響で俳句に親しんでいた。たぶん一風変わった少年だったに違いない。最近、「俳句甲子園」や「プレバト!!」といったテレビ番組のお陰で俳句に関心を持つ若者が少しは増えたが、まだまだ閑居老人の手慰みという印象は

ついてまわる。私自身、高校時代まで友人に俳句の話をしたことは一度もない。しかし、地元句会や新聞俳壇などで曲がりなりにも句作は続け、毎月、俳誌「駒草」で阿部みどり女の選を受けるのが楽しみとなっていた。

みどり女の俳句はとても瑞々しい感覚にあふれていて魅力的だった。けれども、自然現象があるがままにゆったりと詠う句風は、十代の少年に物足らなさも抱かせた。社会性俳句や無季俳句という世界を知り始めたせいもある。俳句を続けるなら若者としての感情を率直に表現できたらとも思っていたのだ。新しいものにより価値を求め、平坦な道より険しい山道を進みたがるのは、少年であれば自

然なあり方といえようか。手にとった「今日の俳句」は、いろいろな点で新鮮だった。まず新書判、しかも光文社のカット・ブックスだったのがいい。田中一光の斬新な表紙カバーが何とも魅力的だった。上部に「KAPPA BOOKS」とオレンジ色に黒字で記されていたのがイカしていた。さらにタイトルに添えられた、シヨッキングピンクの「古池の「わび」よりダム」の感動」(一)とのキャッチコピーが心を驚つかみにした。黒部ダムの完成がまだ話題になっていた頃だ。極めつけはその下に五・七・五の区切りごと、さまざまに色分けされ、大きな活字で並んでいた十句である。(戦後の空へ青

に払われていくことに似ていた。しかも、ただ払われていくだけではない。次々、今まで見たことのない大きな山が現れ、さらに濃い霧が湧き出す。その連続が俳句の世界の深さと広さを教えてくれるのであった。

俳句は名鑑賞によって初めて名作となるものだ。芝不器男の「あなたなる夜雨の葛のあなたかな」は高浜虚子の、飯田龍太の「二月の川一月の谷の中」は中村苑子や山本健吉の解説で普遍性を得た。本書の冒頭、「新しい美の開花」という章では、戦後まもなく詠まれた俳句や女性の俳句、それに風土の魅力を湛えた俳句が紹介されている。どれも、それぞれ句の価値を高めた名鑑賞といえる。鈴木六林男の「暗闇の眼玉濡さず泳ぐなり」の句の魅力を「肉体によって——それこそ体をはって——自分の意思を示したところにある」と指摘し、佐藤鬼房の「青年へ愛なき冬木日曇る」は、「青年へ(一)」「(一)」という助詞の働き、そ

れに「日曇る」という四音の口ごもった言い方が青年の心情と東北の風土を伝えてやまない」と強調する。島津亮の「怒らぬから青野でしめる友の首」には「美しい退廃」があると切り切る。俳句がこんなにダイナミックに生々しく、しかも多様に現代の人間の姿を表現できると初めて知ったのである。それは自然事象の変化に作者の思いを委ねる、伝統的な俳句とはまったく違った魅力にあふれていた。

俳句の世界が熱っぽく語られていた。結びにあたる「俳句は詩である」という章では、俳句は日常から生まれる詩であるという前提のもとに「詩は存在感の純粹衝動である」と主張した。「詩は肉体である」とも述べている。彎曲し火傷し爆心地のマラソン 兜太 梅咲いて庭中に青鯨が来ている よく眠る夢の枯野が青むまでなどの作品は、その純粹衝動の発露であった。

俳句の世界が熱っぽく語られていた。結びにあたる「俳句は詩である」という章では、俳句は日常から生まれる詩であるという前提のもとに「詩は存在感の純粹衝動である」とも述べている。彎曲し火傷し爆心地のマラソン 兜太 梅咲いて庭中に青鯨が来ている よく眠る夢の枯野が青むまでなどの作品は、その純粹衝動の発露であった。



後七十年以上、一貫して揺るぐことなく堅持し続けてきた、確たる生きる根拠であった。「今日の俳句」はその原点といえよう。同時に、私の俳句の道を示してくれた、かけがえない一書なのである。

高野ムツオ(たかの むつお)

俳人。1947年宮城県岩ヶ崎町（現栗原市）生まれ。10代の頃から俳句を作り始め、阿部みどり女、金子兜太の教えを受ける。高校卒業後、神奈川県で地方公務員として働きながら國學院大学夜間部に学ぶ。大学卒業後は仙台で中学校の国語教員となり、その傍ら句作を続け、塩竈の俳人・佐藤鬼房が主宰する結社「小籠座」に参加。1994年、宮城県芸術選奨、現代俳句協会賞を受賞。2002年、「小籠座」の主宰を引き継ぐ。2014年、句集「萬の翹」にて読売文学賞、小野市詩歌文学賞、蛇笏賞を受賞。その他の句集に「雲雀の血」「蟲の王」「片翹」など。多賀城市在住。



撮影・佐々木隆二

阿部みどり女・金子兜太・佐藤鬼房 ～高野ムツオが師事した三人の俳人～

高野ムツオさんが10代の頃に師事した阿部みどり女は、大正期の女性俳人の草分け的存在です。生まれは北海道ですが、1944年から78年まで仙台に暮らし、「河北俳壇」の選者を長きにわたって務めました。

高野さんは小学4年生のとき、町の句会で作った句がみどり女に褒められたことがきっかけとなり、その後みどり女が主宰する「駒草」に投句するようになります。

大学時代、高野さんは俳句研究会に入り、仲間と切磋琢磨しながら句作に励みます。当時もっとも刺激を受けた俳人のひとりが金子兜太でした。今回の「私の一冊」で取り上げた『今日の俳句』を読み、兜太主宰の結社「海程」に入会。「兜太の人間臭いと句のつくり方」に惚れこんだそうです。

「海程」同人で、金子兜太の良きライバルでもあったのが、塩竈の俳人・佐藤鬼房。高野さんが初めて鬼房の自宅を訪れたのは、昭和50年代の暮のこと。その日は夕方から明け方4時頃まで俳句の話が尽きなかった、と高野さんは回想しています。

やがて鬼房が創刊した「小籠座」に加わり、鬼房に指名されて主宰を引き継いだ高野さん。鬼房は「ことばの力を私に教えてくれた」人であり、その俳句の力が、東日本大震災という危機にあっても「私に俳句をつくらせてくれた」と語っています。

わずか17音であっても、俳句には大きな力が秘められていると感じずにはられません。

(参考文献)『佐藤鬼房展～その生涯と俳句の世界』(2005年 仙台文学館) 『俳句 a あるふぁ』2014年8-9月号(毎日新聞社)



阿部みどり女 1886年～1980年 本名・光子。俳誌「駒草」を創刊主宰。句集に「光陰」「月下美人」ほか。



金子兜太 1919年～2018年 俳誌「海程」主宰。句集に「東国抄」「日常」ほか。写真は、当館で2005年に開催した「佐藤鬼房展」の記念行事で、「鬼房俳句の真髓」と題して講演を行う金子氏。



佐藤鬼房 1919年～2002年 本名・喜太郎。俳誌「小籠座」を創刊主宰。句集に「半跏坐」「瀬頭」ほか。



天才少女・北島マヤと、宿命のライバル・姫川亜弓が、演劇界の幻の名作「紅天女」の主役の座をめぐって競い合う漫画「ガラスの仮面」は、2016年に連載開始40周年を迎えました。漫画家・美内すずえ先生が長年にわたって描き続け、未だに完結していない本作品は、演劇漫画の金字塔として不動の人気を誇ります。単行本49巻（2012年10月刊）までの累計発行部数は国内で5千万部を超え、50巻の発売、そして来たる大団円を、多くのファンが待ち望んでいます。

このたびの展示は、貴重な原画を中心に、「ガラスの仮面」の世界をあらためて振り返り、今後の展開に思いをはせることのできる展覧会となっております。また、美内先生が2017年にデビュー50周年を迎えたのを記念して、デビュー作から最新作まで、「ガラスの仮面」以外の作品のコーナーも設けます。

世代を超えて愛される不朽の名作「ガラスの仮面」。東北では初めてとなる本格的な展覧会に、ぜひとも足をお運びください！



おもな展示資料

(変更になる場合があります)

- ◆「ガラスの仮面」モノクロ原画、カラー原画、掲載誌・書籍
- ◆「ガラスの仮面」が舞台化・ドラマ化された際の資料類
- ◆美内すずえ先生へのインタビュー映像、執筆風景撮りおろし映像
- ◆美内先生の初期作品から最新作までの原画：「妖鬼妃伝」「アマテラス」など



連載40周年記念 ガラスの仮面展

会期=2018年10月6日(土)~11月25日(日)

※休館日=月曜日(10/8は開館)、10/25(木)、11/22(木)

会場=仙台文学館 3階企画展示室

時間=9:00~17:00(入館は16:30まで)

観覧料=一般800円、高校生460円、小・中学生230円

(10名以上の団体各100円引き)

主催:(公財)仙台市市民文化事業団 仙台文学館

共催:朝日新聞社

特別協力:美内すずえ事務所(プロダクションベルスタジオ) 協力:白泉社

〈開催記念イベント〉

1 美内すずえ先生サイン会

日時=10月20日(土) 14:00 ~ ※要申し込み、定員あり

2 ワークショップ「かぎ針編みで紫のバラのブローチを作ろう！」

日時=11月14日(水) 13:30 ~ 15:00

材料費=200円 ※要申し込み、定員あり

3 「ガラスの仮面」のイラスト募集

好きなキャラクター、お気に入りの名場面、グツときたセリフなど、ハガキにイラストを描いてお寄せください！

☆イベントの内容および申し込み方法についての詳細は、配布中のチラシ、ホームページ等をご覧ください。

展覧会
オリジナルグッズ
もりだくさん！



予告

連載40周年記念 ガラスの仮面展



展覧会のための特別描き下ろし原画 ©Miuchi Suzue



美内すずえ先生 (漫画家)

1951年生まれ。大阪府出身。16歳のとき、「山の月と子だぬきと」で集英社「別冊マーガレット」で金賞を受賞、高校生漫画家としてデビュー。1976年から連載の「ガラスの仮面」(白泉社)は開始当初よりベストセラーとなり、少女漫画史上、空前のロングセラー作品として、各界から絶大な支持を受け、TVアニメ化、ドラマ化、舞台化もされている。

学びたい！
味わいたい！

人気を集める「古典文学の魅力」に迫る!!

仙台文学館の展示や資料の収集・保存においては、明治時代以降の「近代文学」を対象としています。毎年「仙台文学館ゼミナール」では古典文学のプログラムも開講しており、会場が満員となるほどの人気講座となっています。終了後のアンケートにおいても、「古語表現の美しさを学びたい」「古典にふれたい」「古典全般に興味がある」「古典を再読したい」……といったように、次回も古典文学を学びたいという声が多く寄せられます。そこで文学館スタッフが抱いた素朴な疑問——言葉つかいも、そこに記される人々の生活も、現代とはまったく異なる昔の文学作品に、なぜこんなに多くの人が惹かれるのか!? その答えに近づくべく、「仙台文学館ゼミナール」の講師を務めるお二人の専門家、津田大樹先生、横溝博先生にお話をうかがいました。

先生が研究していること・
関心事項を具体的に教えてください。

津田先生

「万葉集」の研究に取り組んでいます。表記法も文法も現在と異なるため、まだ読み方が分らない歌や解釈の定まらない歌が残されています。古代の言語や習俗などを広く学びながら、「万葉集」の歌を読んでいきたいと思っています。

横溝先生

王朝物語(※)や歴史物語、日記文学、私家集(※)などが、どのような環境で誰によって書かれ(編纂され)、読まれていたのか(きたのか)、作品の生成と受容について大きな関心をもっています。

※王朝物語：平安時代後期から室町時代前期にかけて、宮廷の文化・美意識などに基づいて創作された物語群の総称。
※私家集：一人の歌人の和歌を集めた歌集。

ひとことでは難しいかもしれませんが、ズバリ、古典文学の魅力とは？

津田先生

現在、書店の棚にはたくさんの方が並んでいますが、千年後にも読み継がれている本は少ないかもしれません。私たちが生涯に読むことのできる本の数は限られています。少しでも良い本をと思っても、それを選別するのは難しいことです。その点、古典は歴史の中で淘汰され選別されてきたものです。

私たちの祖先が、長い年月をかけて伝えてくれた貴重な財産だと思います。私も古典文学の一字一句を大切に受け止めて、読み継いでいきたいと思っています。

横溝先生

文学作品を通じて、様々な時代の人々と交流できることが、古典文学を読むことの大きな魅力の一つだと思います。それとともに、人生についての考え方や価値観に触れて、自分の生き方を反省したり、何より人生を豊かにする心持ちを得られることが、古典文学の魅力だと思います。

長い時間を生き抜いてきた古典文学の表現には説得力がありますね。現代とは異なる世界を旅するような体験ができることも、古典を読む魅力の一つだと思います。



横溝博先生

東北大学大学院文学研究科准教授。1971年生まれ。専門は中古・中世の王朝物語および日記文学。

「仙台文学館ゼミナール」では、多くの方から「古典文学を学びたい」という声が寄せられます。その理由は何だと思われませんか？

津田先生

古典文学を学んでいると、現代の私たちと全く変わらないような、喜びや悲しみの思いが表現されていることに驚きます。また一方では、現代の社会とは全く異なる言葉や、習俗、文化に気付いて驚くこともあります。こうした発見が、私たちの心を動かすのではないのでしょうか。



津田大樹先生

一関工業高等専門学校人文社会領域教授。1967年生まれ。専門は『万葉集』を中心とした古代文学。

文学を通して、いにしえの人々に思いを馳せるとともに、現代を生きる私たち自身を見つめ直すことができるという点に、古典文学を学ぶ意義を感じるのではないかと思います。

横溝先生

教養として古典文学を学びたいと思うこともあるでしょう。また現代の小説にないものを古典文学に求めるといったこともあるかと思いますが、日本の歴史や伝統文化に親しみ、日本人の考え方や感性みたいなものを身につけることで、日本をもっと楽しみたいという気持ちもあるでしょう。そして何より古典の世界から物事の見方や人生を豊かに生き抜くためのヒントを得られるというのが大きいかと思います。

古典文学の入門書、おすすめの本(入手しやすいもの)がありましたら教えてください。また、こんなふうに古典文学を楽しめるという情報があったら教えてください。

津田先生

近年では、岩波文庫、講談社学術文庫、角川ソフィア文庫など、比較的安価で手に入りやすい文庫のシリーズで、信頼できる本文と充実した注記の備わったものが増えてきました。代表的な古典文学を読むことができます。

また、「歌枕とうほく紀行」(無明舎出版、2004年)など、歌枕(※)の地を写真入りで紹介した本があり、古典の和歌を学びながら、そこに詠まれた身近な歌枕の地を訪ねてみるのも楽しいのではないのでしょうか。
※歌枕：和歌に多く詠まれた名所のこと。

横溝先生

岩佐美代子さん(国文学者)の「宮廷文学のひそかな楽しみ」(文春新書、2001年)が古典の入門書として面白いものです。同じ岩佐さんの「岩佐美代子の眼 古典はこんなにもおもしろい」(笠間書院、2010年)は、聞き書きによる伝記ですが、ペテランの古典文学研究者の含蓄ある語りからは、様々なことを教わることができます。

もし京都を歩くのであれば、「京都時代MAP 平安京編」(新創社、2008年)などが、旅のお供としてもオススメのガイドブックです。

〈これまでに「仙台文学館ゼミナール」で取り上げた、おもな古典文学作品〉

『古事記』『万葉集』『蜻蛉日記』『枕草子』『源氏物語』『紫式部日記』『更級日記』『平家物語』『義経記』『おくの細道』

※今年度の「仙台文学館ゼミナール」の申し込みは締め切りしました。



先生がたのお話を通して、千年以上のあいだ人々によって読み継がれてきた作品がもつ強靱な力にあらためて感じ入りました。その力が、さまざまな娯楽や情報があふれた現代においても多くの人の心をとらえるでしょうね。

ひとくちに古典文学といっても、時代ごとに、またジャンル別にたくさん作品があります。これを機に、古典により親しんでみてはいかがでしょうか？